



ション・ウブスターとメランコリィ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 東川, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002259

ジョン・ウェブスターとメランコリイ

東 川 洋 一

John Webster(?1580-?1625)の戯曲 *The Duchess of Malfi* は 1613 年頃制作されており、これは 1567 年に出版された短編小説集 *The Palace of Pleasure* の中の、同名の物語を直接の典拠としている。原典によるとこの物語は、“the miserable discourse of a Princesse loue, that was not very wise, and of a gentleman that had forgotten his estate”であり、ここで強調されるのは「淫らな欲望」“libidinous appetite”の誘惑に対する戒めと、「序列」「Oder」或いは「階位」「Degree」の遵守、この 2 点であった。

Webster がこの物語を戯曲化した時、これらはさほど重要なものとして扱われていないように思われる。¹⁾むしろこの戯曲の焦点は、公爵夫人に加えられる心理的拷問の場面、戯曲全体の構成と、この場面の雰囲気の点から考えて、いくつかの問題を含む第 4 幕 2 場、「牢獄」の場面に向けられている。

夫や子供たちから引き離され、また彼らの死体を見せつけられ（実はそれらは人形に過ぎないものであったが、公爵夫人には知るよしもなかった）、侍女とふたりだけで幽閉された夫人は殆んど発狂寸前にまで追いつめられている。侍女に語りかける夫人の次の台詞は、この場面の彼女の状況を適切に表現したものである。

I'll tell thee a miracle-

I am not mad yet, to my cause of sorrow.

Th'heaven o'er my head seems made of molten brass,

The earth of flaming sulphur, yet I am not mad :²⁾

ところがこうした極度に緊迫した場面に、狂人たちによる仮面劇が、ひとりの口上役によってしつかめらしく紹介されて登場し、歌をうたい、脈絡のない台詞を語り、最後に全員で踊ってから退場する。それと入れ替りに登場した人物が、³⁾夫人に墓を作りに来たのだと告げ、さらに夫人は病いに冒されていて、それが自覚されていないだけに一層危険なものだと語る。それに対して夫人は“Let me be a little merry—of what stuff wilt thou make it?”⁴⁾といった台詞を語る。前述の緊迫した、或る意味では「煉獄」⁵⁾的な状況からは予想し難い反応である。その後で死刑執行人たちが現れ、兄たちの命令だと伝えてから夫人を扼殺する。この戯曲の主人公的立場の公爵夫人が第 4 幕目で姿を消すことの不自然さは、終幕で他の主要人物たち（彼らはすべて“melancholy”と呼ばれるか、或いはそれを強く暗示する姿で現れる）が、互いに相手の見境もなく殺し合うだけの竜頭蛇尾とも言うべき内容と相俟って、戯曲構成上の不均衡をもたらすとする批判の最大の原因とされてきた。⁶⁾本稿ではこれらの問題点を melancholy の概念から改めて考察しようとするものである。

I

まずこの戯曲に用いられた仮面劇の特殊性に触れる必要がある、というのはこの特殊性こそ後に述べることになる melancholy と密接な関連を持つものと考えられるからである。

The Duchess of Malfi が書かれた頃までに、戯曲に仮面劇 (Masque) を挿入する趣向はすでに確立していた。⁷⁾ この仮面劇と後に論ずることになる仮面狂言 (Antimasque) についてはすでに扱ったことがあるので、⁸⁾ ここでは仮面劇の基本的構造と仮面狂言の特徴的要素について触れるに止めたい。前者に関しては、最初に “truchman” 或いは “interpreter” と呼ばれる口上役による仮面劇の紹介があり、続いて仮面劇役者の登場 “Entry”, 仮面舞踏と寸劇風の対話 “Main”, そして仮面劇役者と見物人たちとの交歓 “Revels”, 最後に結びの歌で退場 “Going out”, となっている。⁹⁾ これらは元来宮廷で演じられた仮面劇の構造であったが、その流行が戯曲にも強い影響を及ぼし、そのままの形式を伝えたのである。¹⁰⁾ そして後者の仮面狂言が最初に演じられたのも宮廷においてであった。従来の仮面劇に変化と色取りを添える目的で考案された、この新たな趣向の発案者である Ben Jonson (1572—1637) は *The Masque of Queenes* (1609) の序文の中で次のように述べている。

And because her Ma.^{tie} (best knowing, that a principall part of life in these *Spectacles* lay in they^r variety) had commaunded mee to think on some *Daunce*, or shew, that might preceede hers, and haue the place of a foyle, or false-*Masque* ; … and therefore, now, deuis'd that twelue Women, in the habite of *Haggs*, or *Witches*, sustayning the persons of *Ignorance*, *Suspicion*, *Credulity*, &. the opposites to good *Fame*, should fill that part ; not as a *Masque*, but a spectacle of strangenesse, producing multiplicity of *Gesture*, and not vnaptly sorting with the current, and whole fall of the *Deuse*.¹¹⁾

この「引き立て役」(foyle), 「仮面劇まがいのもの」(false-*Masque*), 仮面劇とは「正反対のもの」(opposites) といった表現から容易に想像されるのは、壮重かつ華麗な “shew” とは逆の、滑稽な、もしくは奇異な “spectacle” である。そしてこの仮面劇に最初に用いられた仮面狂言の舞台設定は “ougly *Hell*” となっていた。¹²⁾

仮面劇の役者が宮廷人、貴婦人たちであったのに対して、仮面狂言は市井の役者によって演じられたのであり、従って戯曲に取り入れられるようになったのも当然のことであった。¹³⁾

このふたつの仮面劇が戯曲に取り入れられ、たんに戯曲の装飾的要素のひとつとしてばかりではなく、より一層積極的な、有機的な機能を果たすことになる。例えば Francis Beaumont(1584-1616)と John Fletcher(1579-1625)の *The Maid's Tragedy*(1611)の仮面劇はその好例であろう。

これは第1幕2場で演じられる祝婚仮面劇で、“Night”, “Cynthia”, “Neptune”, “Eolus”などが登場し、新婚の「穏やかな夜」(*gentle night*)を祝福するための趣向であったが、不意にその中に、狂暴な “Boreas”が繋がれていた鎖を引きちぎって逃げ出し、海に大嵐を巻き起したとの報告がもたらされる。“Neptune”がその嵐を静めるべく遣わされるが、ほどなく空が白み始め、“Night”と “Cynthia”はそれぞれ、“mists”と “day”の中へ姿を消し、不安な夜明けを暗示してこの仮面劇は終る。

ここで暗示された「大嵐」(storm)と鎖を引きちぎった “Boreas”が、実際の戯曲世界での出来事と具体的に照応していることから、¹⁴⁾この仮面劇がたんなる芝居向きの場当たり効果だけをねらいとしたものではなく、ひとつの雰囲気を作り上げ、来るべき破局を予兆する機能を帯びたものであることがわかる。

こうして仮面劇が有機的に戯曲世界と結びついていくと同様に、仮面狂言も又、戯曲世界の不可欠の一部となっていく。一般に Webster の時代に用いられた仮面狂言には、前口上も、役者紹介もなく、突然登場してその特徴的な所作を演じ、与えられた台詞を語って退場するといった程度の趣向であった。¹⁵⁾ところで当時の観客がこの仮面狂言に期待したものについて非常に簡潔に述べてい

る部分があるので次に引用する。

At noble Vermandero's, our castle-captain,
 There is a nuptial to be solemnized —
 Beatrice-Joanna, his fair daughter, bride, —
 For which the gentleman hath bespoke our pains,
 A mixture of our madmen and our fools,
 To finish, as it were, and make the fag
 Of all the revels, the third night from the first ;
 Only an unexpected passage over,
 To make a frightful pleasure, that is all.¹⁶⁾

予想外の登場によって観客の度胆を抜き、それから笑わせるもの、いわゆる“frightful pleasure”が仮面狂言の第一の目的であったと思われる。

ところで Webster の場合に戻ると、第 4 幕 2 場の狂人たちによる仮面劇の構造が、先に述べた宮廷仮面劇のそれを踏まえたものであることがわかる。ところが狂人たちの滑稽で奇異な台詞、陰うつな音楽に合わせた踊り等は明らかに仮面狂言の特徴を備えたものであるにも拘らず、口上役によって狂人たちが、ひとりひとり紹介されるとなれば、仮面狂言個有の目的である“frightful pleasure”の効果は殆んど無に等しくなるであろう。それでは Webster がこうした奇妙な仮面劇を導入した意図は何か、といった疑問が生じるのは当然であろう。

そこで口上役による人物紹介を見るとひとつの興味ある推測が生まれる。その一部を次に引用する。

There's a mad lawyer, and a secular priest,
 A doctor that hath forfeited his wits
 By jealousy ; and astrologian
 That in his works said such a day o'th'month
 Should be the day of doom, and failing of't,
 Ran mad....¹⁷⁾

これらの人物は、多少の厳密さは欠くにしても、この戯曲の公爵夫人を除く 3 名の主要人物を暗示していることである。公爵夫人の兄、枢機卿は“melancholy churchman” (I.i.157)であり、彼の弟 Ferdinand については次のような言及がなされた。“Then the law to him Is like a foul black cobweb to a spider-” (I.i.177-8)さらに公爵夫人の夫 Antonio は、長子誕生に際して星占いをしたことがあった。¹⁸⁾そして「医者」は第 5 幕目に登場することになる。

そこで既に触れた通りこの戯曲の主要人物が（公爵夫人を含めて）すべて“melancholy”と呼ばれていたこと、当時の melancholy の概念には狂気も含まれていたこと、及び、第 4 幕目の公爵夫人の死が、他の主要人物すべてに影響を与え、第 5 幕目では彼等はひとり残らず深刻な melancholy に陥ってしまうこと、これらを考え合わせて先程説明を中絶した、宮廷仮面劇の構造を踏まえながらも、仮面狂言的特徴を持つ例の変則的な仮面劇の意図を論ずる為には、次に melancholy を取り上げねばならない。

II

この戯曲で用いられる melancholy は 2 種類に大別される。ひとつは“out-of-fashion melancholy” (II. i. 85-6)なる表現に暗示された「気取り」(affectation)としてのそれである。¹⁹⁾もうひとつは、

主要人物のひとりが陥った「狼狂」"lycanthropia" (V. ii. 6) なる狂気を説明する医者次の台詞に認められる。

In those that are possess'd with't(i. e., lycanthropia) there o'er-flows
Such melancholy humour, they imagine
Themselves to be transformed into wolves.²⁰⁾

或る "humour" が過剰になると様々な精神異常を引き起こし、最悪の場合は狂気に至るという考え方は当時一般に行われていた²¹⁾。つまり人体には4種類の humour(Melancholy, Phlegm, Blood, Cholera)があり、これらが均等に混合し調和した者が理想的な人間と考えられたが、多くの場合いずれかが過剰となっていて、それぞれ melancholy, phlegmatic, sanguine, choleric といった気質を示す。例えば次の引用文は、これらの特徴を要約したものであった。

(he is neyther) to phantastikely melancholy, too slowly phlegmaticke, too lightly sanguine, or too rashly cholericke,...²²⁾

またこれらの "humour" は、極端な精神的興奮を体験することによって生じた過剰な熱によって、腐ったり焦げたりすることがあり、しばしば "melancholy humour" に多く認められた為に、そうした状態は melancholy adust と呼ばれたが、これらには他の3種の場合も含まれていた。²³⁾

前述の "lycanthropia" はこうした概念からすると、melancholy adust の症例、特に、その人物が発狂する以前の気質がいわゆる choleric であったこと(Rhubarb, O for rhubarb To purge this cholera! II. v. 12-3)から、より正確には cholera adust の最悪の結果と考えられる。この症例についてはすでに次のような説明がなされていた。

...But of all other, that melancholy is warste, whiche is ingendered of cholera, finally all aduste melancholye annoyeth the witte and judgemente of man. For when that humour is hette, it makes men mad²⁴⁾.

この人物とは公爵夫人の兄のひとり Ferdinand であるが、彼が妹の秘密裡の結婚を知らされた時の異常な激怒、もうひとりの兄枢機卿でさえ驚ろいた程の「度を越した」(intemperate)²⁵⁾言動を説明するのも、この cholera adust なのである。この戯曲が書かれた数年後に、Robert Burton(1577-1640)がその大著 *The Anatomy of Melancholy*(1621)の中で、この cholera adust についてさらに具体的な解説を加えている。

If it(i. e., melancholy adust) arise from cholera adust, they are bold and impudent, and of a more harebrain disposition, apt to quarrel and think of such things, battles, combats, and their manhood; furious, impatient in discourse, stiff, irrefragable, and prodigious in their tenets; and, if they be moved, most violent, outrageous, ready to disgrace, provoke any, to kill themselves & other;...²⁶⁾

自ら公爵夫人の殺害を命じておきながら、その死体を前にして思わず眩暈を覚える程の衝激を受けた Ferdinand が口にする次の台詞もまた、上に引用した症状によって説明されると思われる。

I bade thee, when I was distracted of my wits,
Go kill my dearest friend, and thou hast done't.²⁷⁾

同様に枢機卿の言動(特に第5幕目の)も(humourとしての)melancholy adustによって説明される。公爵夫人の死後、彼は極端な猜疑心に襲われる。(彼自身の独自から妹の殺害を弟に唆かしたのは枢機卿であったことが知らされる)。Ferdinandを通して自分の罪の発覚するのを恐れる余り、枢機卿は弟の部屋に他の人物を一切近づけまいとして殆んど異常とも滑稽とも思える程、念の入った指示を与える。相手の名誉にかけて彼の指示に従うことを約束させた上で尚かつ枢機卿はこう付

け加える。

It may be to make trial of your promise
When he's asleep, myself will rise, and feign
Some of his mad tricks, and cry out for help,
And feign myself in danger.²⁸⁾

さらに罪の意識に悩まされた枢機卿は「地獄」に思いを馳せたり、或いは庭の池を覗き、そこに「熊手で武装したもの」(a thing, arm'd with a rake) が自分に襲いかかるといった幻想に取り付かれる。²⁹⁾ こうした症状を Burton は次のように要約する。

If it come from melancholy itself adust, those men ... *are usually sad and solitary, and that continually, and in excess, more than ordinally suspicious, more fearful, and have long, sore, and most corrupt imaginations.*³⁰⁾

公爵夫人の夫 Antonio の場合は、この両者ほど極端な症状は示されてはいないものの、それでも第5幕3場、公爵夫人の墓地(彼はこの時にはまだ公爵夫人の死を知ってはいない)で、死者に思いを馳せたり、一瞬間、「悲しみに包まれた顔」(a face folded in sorrow) を見るような“fancy”に陥ったり、或いは自分を死者の如く思い込む状態になっている。³¹⁾ Burton は先に引用した部分の直後に、このような Antonio の状態も“melancholy itself adust”の症状のひとつであることを簡潔に述べているが、“they dream of graves still, and dead men, and think themselves bewitched or dead”³²⁾なる説明に見られる“bewitched”な状態こそ、Antonio の台詞に漂う悲哀と絶望の調べを繰り返し、限りない余韻を残す“Echo”によって暗示されるものである。

最後に残された人物、公爵夫人殺害の現場に立ち合った、枢機卿と Ferdinand の手元である Bosola もまた兄弟に共通した罪の意識に悩まされ、その挙句公爵夫人の亡霊につきまといられることになるが、彼の場合、前述の人物たちと違ってはっきりと自分の melancholy を自覚している為、ここで論じられる melancholy adust の概念には含まれない。しかしながら彼も第5幕の他の主要人物同様「ひしひしと我が身に感じる地獄の苦しみ」(this sensible hell, IV. ii. 343) を体験しているのだ。それでは Bosola の場合と違って「自覚されていない」(insensible, IV. ii. 120) 危険な病気にかかっていると言われた公爵夫人の場合はどうであろうか。

III

この戯曲の原典となった *The Palace of Pleasure* のモルフィ公爵夫人像は「家門の誇り」(the greatness of my house) を強く意識しながらも「多情な肉体を撻り煽り立てるもの」(the ticklish instigations of hir wanton flesh) すなわち“libidinous appetite”に駆られた淫婦として説明されていた。Webster の公爵夫人はそれ程露骨に多情な女性としては描かれていないが(むしろ美化されたきらいがないでもない)、それでも彼女は兄のひとりから“lusty widow” (I. i. 340) と呼ばれた。文脈上この“lusty”には“merry”のみならず“lustful”の意味も含まれていたはずである。³³⁾ このような女性は当時の一般通念に従えば、例えば Shakespeare がひとつの irony を込めて或る人物に語らせた次の台詞に要約される。

Oth. Give me your hand ; this hand is moist, my lady.
Des. It yet has felt no age, nor known no sorrow.
Oth. This argues fruitfulness, and liberal heart ;
Hot, hot, and moist, this hand of yours requires
A sequester from liberty ; ...³⁴⁾

この“Hot, hot, and moist”とは言うまでもなく Blood humour,即ち sanguine の特性を意味している。そして Webster はこの戯曲のいくつかの場面—第1幕1場、公爵夫人の大胆で雄弁な求愛場面、第3幕2場での陽気な私室の場面など—で、この sanguine の次に述べる特徴を利用しているのだ。

The sanguine are cheerful, courageous, kind, and, ingenious.³⁵⁾

それ故に、第4幕2場で「自覚されていない」危険な病気というのが、この気質の悪化した状態、つまり sanguine adust を暗示するものと考えられる。(事実公爵夫人のふたりの兄も Antonio も、自分たちが、いわゆる melancholy adust の状態であることを自覚してはいなかったのである。) この sanguine adust に個有の症状について Burton は次の説明を与えている。

If it proceed from blood adust, ... they are much inclined to laughter, witty and merry, ... if they be not far gone, much given to musick, dancing. They meditate wholly on such things, and think *they see or hear plays, dancing, and such like sports*(free from all fear and sorrow.³⁶⁾ さらに上述の後半に見られる斜体部分、Burton が特に強調している症状を、彼以前にはこうも説明されていた。

If blood minister matter to this fire, every serious thing for a time, is turned into jest, & tragedies into comedies, and lamentation into giggles and dances.³⁷⁾

いわゆる「煉獄」的緊張感の漲っているこの場面からはほど遠い“Let me be a little merry”なる公爵夫人の反応を説明するのは、この sanguine adust ではあるまいか。またこの4幕目で姿を消すことになる主人公のひとりとして、終幕で展開される、いわゆる melancholy adust の世界—それも彼女の死が直接の原因となって展開される地獄図なのだが³⁸⁾—、Bosola の言葉を借りるなら“this sensible hell”の住人たちの有様を、少くとも公爵夫人なりに(つまり彼女の sanguine adust を通して、ということだが)知っておく必要があることを作者は考えていたに違いない。

O that it were possible we might

But hold some two days' conference with the dead,

From them I should learn somewhat, I am sure

I never shall know here : —³⁹⁾

これは既に引用した、あの「煉獄」的状況を暗示する台詞に直結する部分であり、それ故に逆説的表現となっている。と同時に、「死者たち」(the dead)ならぬ“this sensible hell”,いわゆる melancholy adust の人物たちの状況が、それぞれの最悪の結果を体現した「狂人たち」の一群として、仮面劇の中に集約されることになるのだ。

先に触れたように、この仮面劇は仮面狂言の内容にも拘らず、いわゆる宮廷仮面劇の構造を遵守している変則的な形態であった。この場面に「狂人たち」を送り込む第一の目的は、公爵夫人を狂気に駆り立てること。⁴⁰⁾つまり、彼女から眠りを奪う拷問の一種として Ferdinand が考え出したものであったが、⁴¹⁾実際に公爵夫人に紹介された時には前述の如く複雑な形態となっている。これは明らかに戯曲の構成上の必要から挿入された仮面劇—すでに Beaumont と Fletcher の例で見た、来るべき戯曲世界での出来事を暗示する機能を持った仮面劇—である。さらにこの仮面劇全体の印象が滑稽で不合理なものすなわち仮面狂言的となっているのは、第5幕目の或る意味で悲劇的で深刻な melancholy adust の世界が裏返された状態、つまり“tragedies into comedies, and lamentation into giggles and dances”として以外には映ることがなかったモルフィ公爵夫人の“insensible”な病気—sanguine adust—の必然的結果なのである。

The Palace of Pleasure の物語で、公爵夫人の死が“libidinous appetite”の誘惑に負けて身分違いの男と再婚した名門の夫人に対する一種の社会的制裁として説明されていたことは既に述べたが、

Webster はこれを種本としてひとり公爵夫人のみならず、この戯曲の主要人物すべての生と死とを、それぞれ個有の melancholy adust の必然的帰結として戯曲化したように思われる。彼が当時の melancholy 理論をどの程度深く理解していたかは疑問の残るところだが(例えばこの戯曲全体は勿論のこと他の戯曲等を含めて、melancholy adust なる言葉は一度も用いられてはいない)、それは今後の課題として、次に引用する Ferdinand の台詞、死の直前に正気に戻った彼の、暗示的でそれ故にわれわれにとっては非常に危険な魅力を持った dying speech を通して想像されることは、これまで述べてきた melancholy adust にこの戯曲世界の因果律の一切を、あるいは Webster が求めようとしたかも知れないということである。

My sister! O! my sister! there's the cause on't :

Whether we fall by ambition, blood, or lust,

*Like diamonds, we are cut with our own dust.*⁴²⁾

註

- 1) この戯曲のいわゆる motivation をめぐって従来、社会的規範、神学的機構及び個人的感情等から種々の説明が試みられてきたことは事実である。或いはそれらのいずれにも属さない、人間には制御不可能な “destructive instincts in human nature” (Travis Bogard, *The Tragic Satire of John Webster*, Russell & Russell, 1965, p. 51.)や “chance, independent of good and evil, physics and metaphysics” (Gunnar Boklund, *The Duchess of Malfi, Sources, Themes, Characters*, Harvard UP., 1962, pp. 129-130.)に至るまで、取り扱われない motivation の種類は殆んど無いといってよい程である。ここにこの戯曲の特殊性の一端が窺われるであろうし、同時にまたいずれの motivation も結局は相対的意味しか持ち得ないことの証明がなされていると考えられる。
- 2) John Webster, *The Duchess of Malfi*, IV, ii, 23—26.尚本戯曲からの引用はすべて John Russell Brown 編 *The Duchess of Malfi*(The Revels Plays)に拠った。
- 3) この人物は老人に変装した主要人物のひとり Bosola である。Inga-Stina Ekeblad は、この老人の登場以後の場面とそれ以前の狂人たちの場面とを、ひとつの大きな metaphor—結婚と死の仮面劇—の両半分と考えている。Cf. “The ‘Impure Art’ of John Webster,” *Review of English Studies*, IX(1958) : 253—267.確かに当時の戯曲に於て、愛と死の結びつきを仮面劇を通して表現する技法がひとつの慣習として定着していたことは、*The Malcontent* (1604) 第5幕6場の Maria の台詞(41—43)に暗示されている通りだが、Ekeblad が前半の狂人たちの仮面劇の機能を、公爵夫人の再婚に対する一種の “charivari” に限定することには疑問が残る。というのは Webster が *A Monumental Columne* (1612) の中で言及している Princess Elizabeth の結婚に際して “masque of lunatics” が演じられていなかからである。Cf. F. L. Lucas 編 *The Complete Works of John Webster*(Gordian Press, 1966), Vol. II, p. 181.
- 4) その後に続く Bosola の台詞に示される、両手を頬にあてがって俯向く “princes’ images”(Ibid., IV, ii, 156)が当時の典型的な melancholy の図像を暗示している点に注意しなければならない。
- 5) M. C. Bradbrook, *Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy*(Cambridge UP., 1964), pp. 205—207.
- 6) F. L. Lucas, *op. cit.*, pp. 28—35.勿論第5幕目を “satiric story” と見做す T. Bogard や “the education of Bosola by the Duchess” といった教訓物語として、戯曲全体の主題構成の中に位置づけようとする I. Ribner 等の試みもない訳ではなかったが、Cf. T. Bogard, *The Tragic Satire of John Webster*(Russell & Russell, 1965), p. 140. I. Ribner, *Jacobean Tragedy*(Methuen, 1962), pp. 113—116.
- 7) A. H. Thorndike, ‘Influence of the Court- Masque on the Drama, 1608—15,’ *PMLA.*, XV (1900), 114—120.
- 8) 東川洋一, 「*The Broken Heart* の Masque と Anti- Masque」『函館英文学』XIV (函館英語英文学会, 1975), 29—36.
- 9) Percy Simpson, ‘The Masque’ in *Shakespeare’s England*, II (Oxford, 1950), 317.
- 10) Ben Jonson をはじめ Beaumont と Fletcher, George Chapman, John Marston 等当時の代表的な劇作家たちが、同時に宮廷仮面劇作者であったことから容易に想像されることである。Cf. M. S. Steele, *Plays and Masques at Court : During the Reigns of Elizabeth, James and Charles*(New Haven, 1939).
- 11) Ben Jonson, *Works*, ed. Herford and Simpson, VII(Oxford, 1941), p. 282.
- 12) その後仮面狂言の舞台設定も “Laboratory” (*Mercury Vindicated*), “cliff” (*Oberon*), “wood, a thicket of

- Orpheus, and a cave of Mania" (*Lords' Mask*) 等それぞれの内容に応じて多様なものとなった。Cf. E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, I (Oxford, 1945), 183.
- 13) E. K. Chambers, *op. cit.*, 190—201.
 - 14) 例えばこの仮面劇終了直後、控えの間で繰り上げられる新婚夫婦 Evadne と Amintor との口論と、その直接の原因となる King の好色さという具合に。
 - 15) 例えば *Women Beware Women*, 第5幕2場に挿入されたいわゆる "antemasque" (69)など。
 - 16) Thomas Middleton & William Rowley, *The Changeling*, III, iii, 268—276.
 - 17) John Webster, *op. cit.*, IV, ii, 45—50.
 - 18) この星占いは正確な記述であり、それ故に短命に終るはずの長子がただひとり生き残って公爵領を継承することになるというこの戯曲の irony についての詳細は以下に論じられている。Johnstone Parr, "The Horoscope in Webster's *The Duchess of Malfi*", *PMLA.*, LX(1945), 760—765.
 - 19) 当時はこの意味での melancholy が一般に用いられていた、と言うよりも乱用されていた。Shakespeare が *King John* の中で "Only for wantonness" (IV, i, 16)として皮肉ったのも、また Webster が *A Monumental Columnne* に挿入した "Pleasure" と "Sorrow" の寓話の中で「かつては貴頭の胸に抱れた」ことを自慢する "Sorrow" として形象化したのも (John Webster, *Works*, III, p. 279.), さらに *The White Devil* (1612) の中で茶番劇の主題として取り上げた "genteel melancholy" (III, ii, 85)なるものも、この「気取り」としての melancholy であった。
 - 20) John Webster, *The Duchess of Malfi*, V, iii, 8—10.
 - 21) これは Shakespeare が剽軽者の Mercutio に "conjure" させた次の呪文の発想にもなっている。
Romeo! humours! madman! passion! lover! (*Romeo & Juliet*, II, i, 7)
 - 22) Ben Jonson, *Works*, IV, p. 74.
 - 23) Cf. "sanguine, cholericke, or melancholicke, according to the humour thus burned, which we call by name of melancholie." (Timothy Bright, *A Treatise of Melancholie*, p. 111.) また Robert Burton が *The Anatomy of Melancholy* (1622) で扱っている "unnatural melancholy" もこの melancholy adust のことであった。
 - 24) これは Lily B. Campbell が *Shakespeare's Tragic Heroes* (Methuen, 1962) の中で引用している Sir Thomas Elyot の *Castel of Helth* (1539) からの一部であるが、Burton も choleric と melancholy が悪化すれば狂気に至ることを述べている。Robert Burton, *op. cit.*, p. 342. 尚 Burton からの引用はすべて *The Anatomy of Melancholy*, ed. Floyd Deil & Paul Jordan-Smith (George Routledge & Sons Ltd, 1931) に拠った。
 - 25) temper 或いは temperate なる語は人体の4体液の状態に起因するいくつかの特質が組み合わさったものとして、しばしば同義語として用いられた。Cf. Ruth Leila Anderson, *Elizabethan Psychology and Shakespeare's Plays* (Russell & Russell, 1966), p. 31n. 従ってこの場合の "intemperate" の背後には、この瞬間の Ferdinand の状態が「4体液の不調和に起因する絶叫」"intemperate noise" であり、そのための「怒り」"intemperate anger" (*Ibid.*, II, v, 51, 58.) であることが暗示されていることになる。
 - 26) Robert Burton, *op. cit.*, p. 341.
 - 27) John Webster, *op. cit.*, IV, ii, 279—280.
 - 28) *Ibid.*, V, iv, 13—16.
 - 29) *Ibid.*, V, v, 1—7. 尚枢機卿が登場する際のト書き, "Enter Cardinal with a book", は当時の戯曲の典型的な melancholy の人物に与えられたものであった。
 - 30) Robert Burton, *op. cit.*, p. 342.
 - 31) John Webster, *op. cit.*, V, iii, 43—49.
 - 32) Robert Burton, *Ibid.*
 - 33) John Webster, *op. cit.*, I, i, 292—340. この数10行にわたって枢機卿と Ferdinand は交互に公爵夫人の再婚を威嚇的に禁ずるのだが、特にこの言葉を語る Ferdinand の台詞は一貫して卑猥な連想に満ちたものであった。
 - 34) William Shakespeare, *Othello*, III, iv, 32—36.
 - 35) R. L. Anderson, *op. cit.*, p. 34.
 - 36) Robert Burton, *op. cit.*, p. 111.
 - 37) Timothy Bright, *op. cit.*, p. 111.
 - 38) Antonio を除く3名の主要人物にとって公爵夫人の死に対する「罪の意識」がそれぞれに melancholy adust の状態をもたらした、極端な精神的興奮となっていることは言うまでもない。そして Antonio が melancholy adust の症状を示すのは, "the Duchess' grave" (*Ibid.*, V, iii, sd.) の場面であった。
 - 39) John Webster, *op. cit.*, IV, ii, 20—23.

- 40) *Ibid.*, IV, i, 126—131.
- 41) 次の公爵夫人の台詞は Ferdinand の意図が皮肉な結果に終わったことを示している。
Indeed I thank him(i. e., Ferdinand): nothing but noise and folly
Can keep me in my right wits, whereas reason
And silence make me stark mad. (IV, ii, 5—7)
狂人たちの仮面劇が登場するのは、その後のことであった。
- 42) *Ibid.*, V, v, 71—73.

(本学講師・函館分校)